Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-17

戴季陶における「中国革命」とその思想 : 中国・日本・アジアをめぐって

久保, 純太郎

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2005-03-25
(Date of Publication)
2007-09-05
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲3482
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1003482

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

【 202 】

氏　　名・（本　籍）	久保　純太郎	（　兵庫県　）
博士の専攻分野の名称	博士（学術）	
学　位　記　番　号	博い第575号	
学位授与の　要　件	学位規則第５条第１項該当	
学位授与の　日　付	平成17年3月25日	

【 学位論文題目 】

戴季陶における「中国革命」とその思想
－中国・日本・アジアをめぐって－

審　査　委　員

主 査　教　授　藤田　裕嗣
教　授　森　　紀子
助教授　緒形　　康
神戸華僑歴史博物館研究室長　安井　三吉

要　旨

これまでの戴季陶研究における問題点は、戴季陶の政治路線(対日外交路線を含む)が戦術的な面で変化したことを明らかにし得たが、その根本にある思想についての考察がなお不十分なことであった。中国大陸、台湾の学術界では、戴季陶が政治路線において一貫して三民主義を信奉し、孫文が主導する革命に従事したことが定説となり、戴季陶が人道主義や社会主義に傾倒していたが、精神的な葛藤を経て三民主義を信奉するに至ったことが看過されていた。日本の学術界では、近年、戴季陶が中国の自強、中日戦争の勃発回避、中国の近代化の推進を動機として、時期によって対日批判(反日)と中日提携(親日)の両極端の発言をして、戦術的な対日外交路線を取ったことが明らかにされた。しかし、それらの戴季陶の対日外交路線研究は、1920年代までが主な対象となっており(その理由として、戴季陶は1930年代以降、日本を論じることが激減したからであるとする)、1930年代以降については看過されていた。

そこで本論では、戴季陶の思想は、中国の国家の独立・発展を実現させるためには国民精神を形成しなければならないという考えにおいて、一貫した論理体系が内在すると仮定し、かつ、彼の考えの形成、発展に沿いながら、その内的な論理の道筋を生かし、そこから彼の思想の体系化を試みるために、彼の著作や行動を整理し、彼の全体像を見直すために、彼の対日外交路線、孫文の理論学説に対する解釈、アジア認識を結び合わせて、戴季陶の政治路線の根拠である、中国の国家の独立・発展を実現させるためには中国の国民精神を形成しなければならないという思想が、どのような過程を経て生まれ、発展していったかを明らかにしようした。

本論の問題設定として、第一に、戴季陶の対日外交路線において対日批判が常にあることと、対日批判と国民精神の形成のつながりを説明すること、とした。

第二に、戴季陶による五四運動時期のマルクス主義理論研究と1920年代半ばの孫文の理論学説の体系化を、国民精神の形成の側面から関連づけて捉えること、とした。

第三に、戴季陶の大アジア主義理解、移民問題に関する言説、礼に関する言説を、国民精神の形成の側面から関連づけて捉えること、とした。

本論では、論証の結果として、以下の事柄を明らかにし得た。

第一に、戴季陶は執筆活動を始める直前に日本の韓国併合を見聞し、日本政府の朝鮮政策と中国政策は非人道であると批判した。彼は中国の革命の成就、中国の自強のために、日本が中国を援助することを説いた。これが彼の中日提携の本質である。また、彼は日本政府の朝鮮政策と中国政策が中国革命の進展を阻害するとして批判したが、その政策は日本国民の意志の現れであり、日本の国家の独立(明治維新)や発展の延長線上に位置づけられ、その意志の方向を規定しているのが国民精神である、と考えていた。また、日本国民が覚醒して中国政策の転換を政府に要求する期待は抱き続けた一方で、中日関係は途切れないという確信を持っていた。したがって、彼は対日批判を通じて、中国国民に自省を促し、国民の意志を団結させることを考えていたのである。

第二に、戴季陶は五四運動時期に、当時の社会変革により古い倫理が崩壊したが、新しい倫理がまだできておらず、これを構築する必要があると考えた。彼は新しい倫理として、中国固有の思想である仁、義などの精神と階級意識に注目した。しかし、孫文の反対もあって共産主義グループから遠ざかった戴季陶は、1920年前半に苦悶を伴いながらも、利他(仁愛)の精神に価値を見出し、利他の精神を孫文の三民主義の中から導き出した。1920年後半には、救国主義としての三民主義を信奉し仁愛精神を持った中国国民党員(中国国民党改組によって入党した中国共産党員も含む)が、西方の科学文明を受容して国民を指導し中国の自強を図ることを主張した。そして、孫文の三民主義を実践する根拠を国家(戴季陶は「三民主義の民国」と言う)に求め、憲政への安定的な移行を保障するため、過渡期における独裁政治の必要性を肯定したが、あくまでも国民の党に対する信頼を失ってはならないと論じた。すなわち、戴季陶の言う三民主義国家とは、民族、民権、民生の三者が一つの全体の部分として並列的に存在するのではなく、民族国家は同時に民権、民生の国家であり、民権国家は同時に民族、民生の国家であり、民生国家は同様にして民族、民権の国家であり、三者が相互に浸透して統一したものであった。また、このような国家が現実に存在するのではなく、このような国家理念こそ一切の革命運動を実践する根拠であるというものであった。

第三に、戴季陶は、中国はアジアの大国であり、またアジアは世界で被抑圧国の最も多い地域である。アジア諸民族の独立こそが、中国革命の最終的な目標であると考え、一貫して、日本政府の朝鮮政策と中国政策が中国革命の進展を阻んでいることを批判した。彼が1920年代後半から1930年代にかけて述べた中日提携、「民族国際」、新亜細亜の構想は、まず中国革命を成就させなければならないという確信に基づいていた。彼は終始、中国の国家的独立を主要任務と考え、独立し富強となった後、周辺のアジア諸民族の独立を援助し、最後に全世界の被抑圧民族と提携することを展望していたのである。中国革命の目標には辺疆建設が含まれており、戴季陶は1920年代半ばから、その重要性を認識していた。辺疆建設に当たっては、三民主義を信奉した、有識、自立的、利他的な精神を身に付けた精鋭分子を養成し、その精鋭分子が移民や辺疆の国民を指導することを考えた。1930年代から1940年代に亘る礼の研究においても、中国固有の文化の復興から始めて世界の最新の科学を受容し、国民精神を形成することを主張した。

以上から、本論は、戴季陶は中国革命の対象を帝国主義列強や軍閥、さらには、国民の精神と能力に向けつづけたが、それは、共和政治の失敗、社会主義への盲信、列強による抑圧を中国国家にもたらした責任が、他ならない共和政治の主体である国民にあるという確信に基づいていたことを明らかにし得た。したがって、戴季陶の政治路線における思想的な変化について考察する場合、中国の国家の独立・発展を実現させるためには国民精神を形成しなければならないという思想は変化しなかった、と捉えることが妥当であると言えよう。

ただし、本論では史料不足の理由で、清末に日本留学から帰国して新聞記者として政治について発言していった動機、および、国民精神の形成を主張する中で仏教と三民主義との関係をどのように論じたのかについて議論できなかった。今後の課題として引き続き取り組んで明らかにさせていきたい。

本論を作成するに当たり、51種類の戴季陶の著作集(戴季陶とほかの人物の著作を収めた著作集を含む)や戴季陶の著作を収めた史料集を収集した。また、戴季陶の著作や講演記録(講演した事実だけを報道する記事を含む)を収めた、漢語・日本語・朝鮮語・英語・ドイツ語の書籍、新聞雑誌、政府档案を収集した。これらの史料の中には、「孫文主義之哲学的基礎」の2種類のテキスト、『国立中山大学日報』、『国立中山大学校報』(一時期『国立第一中山大学日報』、『国立第一中山大学校報』と改称)、『政治訓育』(中山大学)、『湖州』、『考試院月報』、『考試院公報』、『新亜細亜』など、従来知られなかったものが多数含まれている。そして、これらの史料を整理して「戴季陶活動略年譜・著作目録(初稿)」を作成し、本論の附録とした。

また、「雑誌『新亜細亜』論説記事目録」(『神戸大学史学年報』第17号, 2002年5月)を参考論文とする。漢語雑誌『新亜細亜』(1930年10月-1937年4月、1944年7月-8月)は、戴季陶が会長を務めた新亜細亜学会の機関誌であり、1930年代、1940年代中国における辺疆問題と東方民族の解放問題に関する理論、研究成果を見ていく上で重要な史料である。ところが、いかなる事情によるものか、『新亜細亜』を所蔵している研究機関、図書館が少ない上に、いずれも不揃いであり、そのために『新亜細亜』の全容を把握することは極めて困難であった。そこでひとまず、論説記事の目録を作成した次第である。

［課程博士用］
（別紙１）

論文審査の結果の要旨

氏　　名	久保　純太郎
論文題目	戴季陶における『中国革命』とその思想 －中国・日本・アジアをめぐって－

要　　旨

本論文は、中国国民党、中華民国国民政府の重要な構成メンバーである戴季陶（1891～1949）について、「国民精神の形成」というキーワードを軸に、その政治思想の体系化を試みたものである。戴季陶は孫文の秘書というその経歴から、孫文思想の忠実な祖述者と見られることが多く、孫文とは異なる彼独自の考え方に焦点が当てられることはほとんどなかった。また、近代中国の政治家中、屈指の日本通である彼の日本観の研究も、1920年代の著述である『日本論』に大きく偏ったものであった。本論文は、そうした戴季陶研究の問題点を克服するために、初期戴季陶の著作や行動に詳細な分析を加えた外に、1930年代以降の戴季陶の「アジア主義」に関して多くの史実の掘り起こしを行った。そして、近代中国の独立・発展を実現するために国民精神を形成する必要があるという認識において、戴季陶の思想が一貫していたという仮説に立ちながら、この仮説を証明するために、戴季陶の対日外交政策、孫文学説に関する解釈、大アジア主義と辺境構想という３つのテーマを掲げて、「国民精神の形成」という思想の発展過程を辿ろうとしている。

まず、第１章「対日批判に見る国民精神論」では、初期戴季陶が言論活動を始める原点に日本の韓国併合に対する批判があったことを指摘している。そして、これら対日批判のモチーフは五四運動期、柳条湖事件前後の言論においても基本的に不変であり、1928年の『日本論』もそうした文脈から読解されねばならないことが強調された。明治維新を日本国民の意志の表れとする『日本論』の見解は、中国革命の進展を阻害する日本政府のアジア政策を批判することと矛盾するものではなく、日本国民が覚醒して日本のアジア政策を転換してゆく運動を国民レベルで組織することへの期待の表れに他ならない点が示された。1928年の時点で、日中戦争は不可避であると戴季陶が考えた理由として、本章はこれまで以上に説得力ある見解を提示することに成功している。

第２章「孫文理論学説に対する解釈」における重要な成果は、『孫文主義の哲学的基礎』というテキストに２種類が存在することを発見した点にある。詳細な校訂にもとづくその考察によれば、テキストの第２版は、1925年の孫文によるアジア主義講演の論評に多くの紙幅を費やしており、コミンテルンが推進する国際共産主義運動に対抗すべき「民族国際」（民族インターナショナル）の構想と連動していた。戴季陶の孫文解釈は、孫文学説の機械的な祖述ではなく、孫文のアジア主義に基づきながら、そのアジア連帯の思想を、民族自決主義のインターナショナリズムに再編しようとするものであった。ただ、この魅力的な「民族国際」構想をめぐって、戴季陶が1927年の四一二クーデター以後、沈黙を守ったのは何故かについて、本論文がより踏み込んだ考察を欠いているのは惜しまれる。

主査記載氏名・印	藤田裕嗣

第３章「大アジア主義と辺疆建設」は、中山大学における東方民族院設置構想、西北農業専門学校の建設、新亜細亜学会の創設など、1920年代後半より戴季陶が次々と打ち出した中国国内の少数民族政策に関する新史料を大量に含んでいる。そうした少数民族政策や辺境移民政策において、孫文の三民主義はどのように生かされたのか、また、中国伝統思想である儒教の礼思想がそれらとどのように関連しているのかについて、「国民精神の形成」という角度から、分析が加えられている。戴季陶の大アジア主義は、中国の国家的独立を中心的な目標にすえながら、周辺のアジア諸民族の独立を援助し、全世界の被抑圧民族と提携するという多元的な展望を有したというのが、その主張である。そうした大アジア主義を儒教の文脈で語る際に、戴季陶が、伝統的な漢民族中心主義から必ずしも自由でなかったことにも、目配りがなされている。特に、戴季陶が会長を務めた新亜細亜学会の機関誌『新亜細亜』に関する紹介がこれだけまとまった形でなされたことはなく、中国近代史学界に寄与するところ、きわめて大である。

以上の実証的な考察をもとに、戴季陶の政治路線の何度かの顕著な変化にもかかわらず、中国国家の独立・発展を実現する方途としての「国民精神の形成」というモチーフは不変であった点が、「結論」において改めて強調された。

本論は、浩瀚な『戴季陶活動略年譜・著作目録』を付録としている。同目録は51種類の戴季陶の著作集及び関連史料集から構成され、戴季陶の著作・講演記録を収録した中国語・日本語・朝鮮語・英語・ドイツ語の書籍、新聞雑誌、政府档案が網羅されている。とりわけ、戴季陶の日本語による著述（論説、エッセイ、談話記事）に関する詳細な情報が収集されたことは画期的と言って良いだろう。戴季陶と日本政界・実業界とのさまざまな結びつきについても、この目録は多くの新事実を教えてくれる。「付録」と銘打たれてはいるが、その収集の徹底さにおいて、その目配りの周到さにおいて、これは優に１篇の独立した学術論文に匹敵しよう。

もっとも、この「付録」と「本文」を比較して否応なく感得されるのは、「付録」における膨大な情報が、「本文」において必ずしも充分に生かされていないことであろう。ほんの一例を挙げるなら、近代日本のメディアで戴季陶が極めて重要な位置を占めていたことを「付録」は明らかにしたが、戴季陶が日本近代史に有した意味の考察は、1927年訪日に関する「本文」の叙述では明らかに不十分である。また、「国民精神の形成」というキーワードは、本論文に論理的な一貫性を与えはしたが、他方で戴季陶のダイナミックな思想の記述を平板なものにしたことも否定できない。しかし、そうした問題点を抱えながらも、その地道な実証的知見の蓄積は、今後、中国近代史のみならず、20世紀アジア史という学際的な領域において、豊かに花開く可能性を有している。すでに指摘したような、戴季陶と近代日本という問題領域の発展は、近代日本の政治・経済史学界との意見交換による学際的研究の進展によって可能となろう。本論文は、そうした新領域の開拓という学問的可能性を秘めた実証研究の積み重ねとして、学術的価値を獲得しているものと判断できるであろう。

以上の審査結果をもとに、本審査委員会は全員一致で論文提出者・久保純太郎氏が博士（学術）の学位を授与されるに足る資格を有すると判断した。

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	藤田　裕嗣
副査	教授	森　紀子
副査	助教授	緒形　康
副査	神戸華僑歴史博物館研究室長	安井　三吉